

夏目漱石『硝子戸の中』論

深町博史

一、はじめに

夏目漱石の随想『硝子戸の中』は一九一五（大正四）年の一月一三日から二月二三日にかけて「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」の二紙上に掲載され、同年三月に単行本として岩波書店より刊行された^①。作品は全三九章から成り、筆者の書齋で起こった出来事や幼時の回想などを題材にした述懐が行われている。

本作は自殺に向かう「先生」を描いた『心』と、結末で「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない」と語る健三を描いた『道草』との間に執筆されており、先行研究では多くの論者がこの時期の漱石の思想について論じてきた。とりわけ注目されてきたのが最終章の「微笑」であり、江藤淳は筆者がその「一時の幸福な安息」の中に「『愛』の神話が信じられなくなった時、『悟達』の神話を信じよう」としたと評している^②。これに対して越智治雄は「近代を超脱しようとしているのではけっしてない。ただ、その時代と人とを包括的な小説の世界に定着する視点を予覚しようとしているかにみえる」と述べている^③。また、重松泰雄は過去の回想による「自己救済の効用」を重視し、「『微笑』を絶やさぬ彼の境地によって、すでに超克の方向は示唆されている」として作者の思想的転回を認めている^④。しかしながら、それは柴市郎が「テキストの目的論的進行に従って最終的にそこに到達しテキストを鎖ざす『結末』や、テ

クスト全体がその一点へと収斂させられる『主題』ではありえない」と指摘する通りであって、「微笑」するまでの過程をより重視すべきである^⑤と考える。

硝子戸の中から外を見渡すと、霜除をした芭蕉だの、赤い実の結つた梅もどきの枝だの、無遠慮に直立した電信柱だのがすぐ眼に着くが、其他に是と云つて数へ立てる程のものは殆ど視線に入つて来ない。書齋にゐる私の眼界は極めて単調でさうして又極めて狭いのである。（一）

作品冒頭で伝えられる「私」は「殆ど表へ出ず」に書齋で過ごすことが多く、「世間の様子はちつとも分らない」という。一般の「忙しい人」たちと異なる生活を営む彼は「世の中は大変多事」であることを知るだけで、その意識は社会から隔たっている。わずかに外界とつながる硝子戸からの視界は冬を伝えてくるが単調で狭い。第一章で語られているのは寒い冬に書齋の中で停滞した日々を過ごす「私」自身の姿であるが、その「小さい私と広い世の中とを隔離してゐる此硝子戸の中」を訪ねて来た「思ひ掛けない人」や、そこで起こった「思ひ掛けない事」について書き綴つてゆくのだと述べられている。「さうした種類の文字が、忙しい人の眼に、どれ程つまらなく映るだらうかと懸念してゐる」としなが

らも、「たゞ春に何か書いて見ると云はれたから、自分以外にあまり関係のない話らぬ事を書く」という。読者につまらないものとして読まれる危険を冒してまであえて書斎の中で起きた出来事について書き続けると宣言したのは、何よりも「私」自身が現状に閉塞感を感じ、そこからの脱却を図っていたからではないだろうか。

そこで、本稿では作品の展開に重きを置いて分析考察を行う。様々な人物や話題を取り上げながら進められる語りにおいて何が問題とされそれらがどのように語られていったのか。「心持が悪」く、「たゞ坐つたり寐たりして其日其日を送つてゐる丈」の状況から始められた語りの中に「微笑」に至る契機を見出したい。

二、〈生〉と〈死〉をめぐる

『硝子戸の中』は元日からの連載を期して大阪朝日新聞社より執筆依頼がなされたが、漱石が期日に間に合わせられなかったために一三日からの掲載となった。^⑥

漱石は一九一四（大正三）年一月一日付林原耕三宛書簡に「私は生の苦痛を厭ふと同時に無理に生から死に移る甚しき苦痛を一番厭ふ、だから自殺はやり度ない夫から私の死を厭ふのは悲観ではない厭世観なのである」と書いていた。また、松浦嘉一の回想によると同年の一月二六日に行われた木曜会で「死は只意識の滅亡で、魂がいよ／＼絶対境に入る目出度い状態である」と発言している。^⑦ 二月二七日付の木村恒宛書簡には「歳は行き詰る私の気分も行きづまる何をするのも厭であります」とあり、年末になっても何も手につかなかった様子が窺える。そして、何よりもこの年の一月から二月の間には、『硝子戸の中』において〈生〉と〈死〉をめぐる葛藤が主題となる第六章から第八章までの挿話の素材

となった吉永秀子との面会^⑧が行われているのである。漱石は「気分」の「行きづま」りの原因については何も言及していないが、その一つには〈生〉と〈死〉の問題があったと言えるのではないか。以下、それが作品内でどのように語られているのかを見て行きたい。

第六章と第七章において、過去の「深い恋愛に根ざしてゐる熱烈な記憶」が薄れることを恐れ、「もし先生が小説を御書きになる場合には、其女の始末を何うなさいますか」と尋ねてきた女性との対話が描かれている。「私」はその生きるべきか死ぬべきかの問いに明確な回答が来ず、別れ際に「死なずに生きて居らつしやい」と伝えたという。続く第八章ではそれによって生じた自身の内心の揺らぎについて述べられている。「私」は常に「死は生よりも尊とい」と考えるようになったにも関わらず「解脱する事が出来ない」で「生に執着」し、苦しむ女性に対して「凡てを癒す『時』の流れに従つて下れ」と生き続けることを勧める方が「適当」であるように思えたという。「常に生よりも死を尊いと信じてゐる私の希望と助言は、遂に此不愉快に充ちた生といふものを超越する事が出来なかつた」と語る「私」は、この女性との出会いによって自らの死生観によつては解決のつかない〈生〉と〈死〉の問題に直面し、「今でも半信半疑の眼で凝と自分を眺めてゐる」。

「私」の「死は生よりも尊とい」という考えは、「死といふものを生よりは楽なもの」と信じ、「人間として達し得る最上至福の状態」と思うところから来ている。ただし、それは〈死〉そのものに対する深い洞察というよりはむしろ「不愉快に充ちた生」に対する反感に由来している。〈生〉の嫌悪による〈死〉の肯定こそが彼の「希望」の実態であった。依然として「解脱する事が出来」ずに「生に執着してゐる理由もここにあり、すなわちそこに〈死〉を志向する積極的な根拠がないからである。「私」には元より「生の許す範囲内」での助言しか為し得なかつたように

思われる。

また、「私」は〈生〉への「執着」を認める以上は「互いの根本義は如何に苦しくても如何に醜くても此生の上に置かれたものと解釈するのが当り前」であり、「何ういふ風に生きて行くかといふ狭い区域のなか」で相手に向き合うしかないと述べている。「死は生よりも尊とい」という考えから〈生〉と〈死〉を捉えていた彼にとつては、辛い〈生〉をどのよう生きていくのかということは狭量な問題意識でしかなかった。しかしながら、「不愉快に充ちた生」の認識から「生よりは楽なもの」として〈死〉を位置付けている「私」にこそ、「何ういふ風に生きて行くか」という観点から〈生〉の改善を求めることが必要だったのではないか。ただし、そのことは「今でも半信半疑の眼で凝と自分を眺めてゐ」と語る時点の「私」には自覚されていないと考えられる。

漱石は木村恒宛書簡に「歳は行き詰る私の気分も行きづまる何をすることも厭であります」と記した同日に吉永秀子に対して「私の力ではあなたをどうして上げる訳にも行かない(中略)どうぞ教師として永く生きて居て下さい」と書いた手紙を送っている。その「気分」の「行きづまり」の一要因として、これまでに見てきたような死生観の問題があつたことは間違いないだろう。そしてそれは「今でも半信半疑の眼で凝と自分を眺めてゐ」という第八章を執筆している時点においても継続したものであつたと考えられる。彼はまさに現在抱えている問題をありのままに描出したのである。

第八章以降に〈生〉と〈死〉の問題について直接的に触れられている場面は多くない。第二章では寿命の不思議を考えた時の煩悶が主題となっている。周囲の人が死んでいく中で病気がちの自分が何故生き残っているのか。朝日新聞社の「佐藤君」^⑨を思い出しながら、「彼が死んで私が生残つてゐるのを、別段の不思議とも思はずにゐる時の方が多い。然

し折々考へると、自分の生きてゐる方が不自然なやうな心持ちにもなる」という。彼はその時々考へに翻弄されて「運命がわざと私を愚弄するのではないかしら」と感じるばかりであり、誰にも予測することの出来ない人間の〈生〉と〈死〉の運命に思いを馳せている。また、第三章では「世の中に住む人間の一人として、私は全く孤立して生存する訳には行かない」(三三三)との書き出しから、他者に対する際の悩みが語られている。「馬鹿で人に騙されるか、或は疑ひ深くて人を容れる事が出来ないか、此両方だけしかない様な気がする」という「私」は、「不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる」〈生〉の多重の苦しみの中にあつて疑う余地のない誠実な人間関係を切望し続けている。

この第二章と第三章において注目すべきは、他者との関わりにおいて〈生〉の苦しみが語られているという点である。すなわち、「死は生よりも尊とい」として〈生〉か〈死〉かを択一しようとするのではなく、「不愉快に充ちた生」そのものに目を向けているのである。その立場から問われることになるのは「何ういふ風に生きて行くか」という問題に他ならない。自らの苦しい〈生〉の改善こそが、「私」の望みとなつていたのではないだろうか。

生きるべきか死ぬべきかを問いかけてきた女性との出会いによって「私」の「死は生よりも尊とい」という自足的な死生観は揺らいでいる。他者との関係性の中に自身の〈生〉の現実を認識したことで、彼は新しい死生観の構築に向かい始めたと言えよう。ただし、依然として〈生〉が「不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる」と感じることに変わりはなく。その解決は最終章にも示されることなく作品は閉じられているが、それでは「不愉快に充ち」ている〈生〉の改善はいかにして求められるのか。別の観点から作品を捉える必要があるだろう。

三、「時」の力の諸相

『硝子戸の中』の大きな特徴としては越智治雄が早くから着目した「章数にして全体の約半数に達する過去があり、それが『私』の現在に自由にはいり込んでくる点」が挙げられる。越智は作品の構想と見られる「断片」と作品とを比較して「ノートの段階では、これほど過去の比重について漱石は意図的であったとは思えない」と指摘している。漱石が執筆を進めるうちに元の構想には見られなかった幼時の回想をするようになった点については重松泰雄も注目しており、特に第一四章以降に「回想部分と非回想部分とがほぼ整然と交互に並べられている」のは「現在から過去へ、過去から現在への振り子運動のうちに、現実の苦澁を浄化し、中和し、且つまた相対化せんとする試みだったのではないか」と述べている^⑧。先行研究では過去の回想という点から論じられることも多いが、本章では「私」の語りの中に数多く見出される時間の流れに対する意識に着目したい。

作中から「時」として鉤括弧に括られたものだけを列挙すると、「全てを癒す『時』の流れ」(八)、「公平な『時』」(同)、「恐ろしい『時』の威力」(二〇)、「『時』は力であつた」(二三)の四例が挙げられる。それらを見てみても時間に対して多様な捉え方がなされていることが分かるが、これらの他にも時間の流れに対する多様な意識が読み取れる。そこで、これ以降、「硝子戸の中」を読み解くうえでの鍵になっていると考えられる「時」の力の諸相に焦点をあてて作品の展開に沿って考察を進めることとする。

第四章では病気を患い床に就いていた「私」が一ヶ月振りに犬のヘクトーと会った時に、ヘクトーが呼びかけに反応しなくなっていたことが語られている。「私」は「彼がもう主人の声を忘れてしまったものと思つ

四

て、微かな悲哀を感じずには居られなかつた」といい、続く第五章では、猫の古い墓標と、死んでしまったヘクトーの新しい墓標とを眺め、「ヘクトーのはまだ生々しく光つてゐる。然し間もなく二つとも同じ色に古びて、人の眼に付かなくなるだらう」と感慨している。第八章では恋愛の記憶を抱えて苦しむ女性に「凡てを癒す『時』の流れに従つて下れ」と助言を与えたことについて語られている。第一〇章では友人〇との久し振りの再会時に「恐ろしい『時』の威力に抵抗して、再び故の姿に戻る事は、二人に取つてもう不可能であつた」と感じたことが、第七章ではかつて芸者であつた御作が「品の好い奥様」となった姿を見かけたことを思い出し、更に彼女が死んでしまつていふことを聞いて驚いている。

「私」は第八章で「時」が「公平」であると述べていたが、作品の前半部分に見られる「時」の力は癒しを含みながらも忘却や老いなどの変化、あるいは郷愁をもたらし淋しさや悲しみを引き起こすものとして捉えられている。

ここで第八章における「時」の認識を取り上げたい。「私」は悲痛な記憶を抱えて苦しむ女性に、「凡てを癒す『時』の流れに従つて下れ」との助言を与えた。「死は生よりも尊い」という思いに反して与えられたこの言葉は、「公平な『時』は大事な宝物を彼女の手から奪ふ代りに、其傷口も次第に療治して呉れる」という考えによるものであつた。ただし、「いくら平凡でも生きていく方が死ぬよりも私から見た彼女には適当だった」とも述べているように、彼は時間の経過による苦痛の軽減を待つという方法を、辛い〈生〉の苦しみに対する積極的な手段としては捉えていなかった。それは、前章に述べたように、この時点で〈死〉をより「尊い」とも考えていた彼が〈生〉に対して消極的であり、「何ういふ風に生きて行くか」を「狭い区域」の問題と見ていたからである。作品前半

における「時」の力への視線の暗さは、「不愉快に充ち」た〈生〉の現状にその原因を求めることができないのではないだろうか。

第二〇章では、かつて住んでいた町の豆腐屋の隣に寄席があったことを覚えているが、そこに寄席があるはずがないという現在の疑いが「記憶に霞を掛け」ているようで、思いつく度に「奇異な感じ」がすると書かれている。第二三章では、子供の頃には嫌っていた父の「虚栄心を、今になつて考へて見ると、厭な心持は疾くに消え去つて、只微笑したくなる丈である」と述べ、「崩れて仕舞へば好いのに」と思っていた生家について、「『時』は力であつた。去年私が高田の方へ散歩した序に、何気なく其所を通り過ぎると、私の家は綺麗に取り壊されて、其あとに新しい下宿屋が建てられつゝ、あつた」と伝えている。第五章の大塚楠緒子の回想では、会話の内容は「遠い過去になつて、もう呼び出す事の出来ない程、記憶の底に沈んでしまつた」とする一方で、「美しい人」であつたという印象が強調されている。第二八章では、一見して助からなと思つたほどの皮膚病を患っていた猫が回復し、病氣前よりも太りだした様子が語られている。第二九章では子供の頃に下女から受けた親切を思い出し、「不思議にも私はそれ程嬉しく思つた下女の名も顔も丸で忘れてしまつた。覚えてゐるのはたゞ其人の親切丈である」と述べている。

作品の中頃では、まず過去の記憶が現在の認識によつて疑わしく思えることが語られる。しかし、時間の経過によつて嫌悪が許しに変わり、美しい記憶や嬉しかった思い出が純化されることも確認されている。また、「時」の流れの中で衰えていったものが同じ「時」の流れの中で回復し、以前よりも力強くなることもあるということが観察されている。第二三章以降からは「時」の力が肯定的な影響をもたらす側面が読み取れるようになるが、殊に第五章ではその事が明瞭に確かめられる。

第五章で大塚楠緒子に関して語られているのは、「私」が「心を腐蝕

するやうな不愉快の塊」を抱えた雨の日の散歩中に見かけたその美しい姿に「見惚れてゐ」た事と、彼の勘違いに対しても「顔を赧らめ」ず「不愉快な表情も見せなかつ」た事と、夫婦喧嘩後の「厭な顔」を見せない為に自宅訪問に応えなかつた非礼を詫びに訪ねた事である。詳細は「もう呼び出す事の出来ない程、記憶の底に沈ん」でいるものの、「私」は楠緒子によつて「不愉快」な気分が晴れたかのように當時を回想しており、彼の誠実な対応からも故人に対する好意が窺い知れる。その死に際しては「ある程の菊投げ入れよ棺の中」という句を作っていたが、在りし日の姿を伝える語りからは、手向けの一七字に込められているような激しい嘆きは読み取り難い。ここにおいて「私」は「凡てを癒す『時』の流れ」の力を実感したと言るのであつて、静かに回想する彼は自らの心の変化を悔いてもいない。「凡てを癒す『時』の流れ」の力が、かつてそれを女性に勧めた時点で考えていた以上に〈生〉を改善していけるものであることを自ら確かめているのだと言える。それは第二三章における過去から、第二八章のような現在に近い時点においても確かめられている。

第二八章では皮膚病から回復し、「以前より肥え始め」た猫と自分の病氣の経過を比較した時に「其所に何かの因縁があるやうな暗示を受ける」という。「すぐ其後から馬鹿らしいと思つて微笑する」というが、彼が猫に「因縁」を感じるのは、自ら回復以上のものを実感しているからに他ならない。「私」は「硝子戸の中」の語りを進める過程で自身の中にも「時」の力のより良い側面を見出したのである。そして、このような認識の変化は、同時に〈生〉への希望にもなつたはずである。

作品の構想を記した「断片」は数度にわたり加筆が行われたと考えられているが、漱石はその中に三度、大塚楠緒子の名を記しており、それぞれ「(22) 楠緒子 妾ヲ撃退ス」、「楠緒さん」、「30大塚婦人の事、妾撃

「退」である。「妾」や「撃退」の意味するところは不明であるが、楠緒子の行動を伝える構想が作品化されなかった事は確かである。実際に書かれたのは、楠緒子の美しい姿を思い浮かべながら「ある程の菊投げ入れよ棺の中」の句を手向けた過去を遠く回想している自己の姿である。無論意識されているのは「時」による慰めであろう。先に引用した通り、重松泰雄は「現在から過去へ、過去から現在への振り子運動のうちに、現実の苦渋を浄化し、中和し、且つまた相対化せんとする試み」であったと述べているが、ここでの漱石はただ楠緒子の回想に浸っているのではなく、そこから現在をも見つけている。構想と実作との相違の中に、漱石が過去から現在にわたる「時」の力に目を向けるようになったことが裏付けられるだろう。彼はその時々々の関心の在り方に応じて構想を変えながら、柔軟な執筆を行っていたのである。

第三〇章には、「継統中」という言葉を聞かされた時に「好事を教へられたやうな気がし」て、その言葉を積極的に使用している様子が報告されている。第三章では、昔よく聞いていたという講釈家の講釈を近年になって再び聞いた感想として「全く昔の通りであつた、進歩もしない代わりに、退歩もしてゐなかつた」と感じ、「廿世紀の此の急激な変化を、自分と自分の周囲に恐ろしく意識しつつあつた私は、彼の前に坐りながら、絶えず彼と私とを、心のうちで比較して一種の黙想に耽つてゐた」という。第三章では、若くして亡くなった兄と恋仲にあつたと思われる女を思い出してまた会つてみたいと思つたが、「彼女が今になつて兄の弟の私に会ふのは、彼女にとつて却つて辛い悲しい事かも知れない」と考え直している。そして、第三章で「私」は「母の記念の為に此所で何か書いて置きたい」として過去の思い出を綴り、続く第三章には「夢とも現実とも判断のつかない母の記憶に對して、「何うしても私は實際大きな声を出して母に救を求め、母は又實際の姿を現はして私に慰藉の

言葉を与へて呉れたとしか考へられない」と書いている。

作品の終盤には「私」がその流れの中でより良い〈生〉の方向に目を向けていこうとする態度が新たに現れて取れる。それまでには「時」があらゆるものを変化させてしまうことが確かめられてきたが、かつて聞いた講釈のように、その流れによつても変らないものがあつたのだということを書き出している。また、失われつつある「大変嬉かつた」という思いや曖昧な記憶を永く留めておくために「母の記念」としてこの文章を書き残しているのだという。そして、これまでに「時」の力の諸相を知り、その大きな流れの中でも自分が出来ることを実践した「私」は、次章で『硝子戸の中』の語りを閉じる。

ここで特に注目したいのが、第三〇章の「継統中」という言葉である。「私」は当初病氣の状態を表すために用いていたその言葉を広く一般化して人生にも適用し、「所詮我々は自分で夢の間に製造した爆裂弾を、思ひ／＼に抱きながら、一人残らず、死といふ遠い所へ、談笑しつつ、歩いて行くのではなからうか」という考えを導いている。ここでは〈生〉と〈死〉が「時」の流れの中で連続したものと捉えられるようになってくる。第八章においても「自分の何時か一度到着しなければならぬ死といふ境地」という言葉が用いられていたが、その時点での死生の意識は「不愉快に充ち」た〈生〉か「尊と」い〈死〉かという二者択一であった。しかし、「時」が「継統中」の〈生〉をより良くし得るものであることを認識している第三〇章で強く意識されているのは今後「何ういふ風に生きていくか」という問題であろう。

漱石は、『硝子戸の中』の執筆を終えた後の一九一五（大正四）年四月から五月頃にかけて書かれたとみられる「断片」¹⁶に、「〇生よりも死、然し是では生を厭ふといふ意味があるから、生死を一貫しなくてはならない、（もしくは超越）、すると現象即實在、相對即絶對でなくては不可にな

る。『それは理窟でさうなる順序だと考へる丈なのでせう』『さうかも知れない』『考へてそこへ到れるのですか』『たゞ行きたいと思ふのです』と書き込んでいる。この「断片」が実際に交わされた会話の一部を記したものであるのか、それとも創作上のメモであるのかは明らかではない。ただし、ここでは〈生〉を厭う態度から〈死〉を志向する考え方が否定され、双方を「一貫」あるいは「超越」する視点の必要性が記されている。そして、それが「理窟」に過ぎないという事を疑われながら、それでもその境地に「たゞ行きたいと思ふ」のだという。「生死を一貫」という点については第三〇章の「継続中」の考え方に近いと考えられる。前年の書簡に「私の死を扱ふのは悲観ではない厭世観なのである」、「私の気分も行きづまる何をするのも厭であります」などと書いていた漱石は、他者と共有することの出来ない自分自身の死生観に「半信半疑の眼」を向けながら『硝子戸の中』を書き続け、その語りの中から得られた新しい方法で〈生〉と〈死〉を捉えるようになったと言えるのではないだろうか。この転換に關して作品内では直接的には触れられていないが、後に書かれた「断片」からは〈生〉と〈死〉に対する視線に大きな変化が確認されるのである。

作品の前半から「時」の持つ力を様々に語ってきた「私」は、次第にそれを〈生〉に肯定的な側面から捉えるようになり、やがて「継続中」の認識のもとに〈生〉と〈死〉を連続する視点に立つようになる。この変化は、彼が〈生〉を積極的な「時」の流れの中に見出したからであると考えられるが、「継続中」の言葉を得たことよって〈生〉を無批判的な肯定に向ったとは言いがたい。第三章に語られている通り、人生は「不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる」のである。しかしながら、「継続中」の〈生〉において「何ういふ風に生きていくか」という問題を考えるようになったということは、自己変革の機会を得たということでもあ

る。それは第一章で「私」が停滞した自己に求めていたものに他ならない。「時」の力の諸相を様々に捉え、それらを語っていくことで彼はその中に現状打開の手掛かりを得たのである。

四、「硝子戸の中」の他者

「私」は第一章で「小さい私と広い世の中とを隔離してゐる此硝子戸の中へ、時々人が入つて来る。それが又私にとつては思ひ掛けない人で、私の思ひがけない事を云つたり為たりする。私は興味に充ちた眼をもつて夫達の人を迎へたり送つたりした事さへある」といい、「私はそんなものを少し書きつゞけて見やうかと思ふ」と述べている。その言葉通り、作品内では彼の書齋を訪ねて来た様々な人物が登場する。雑誌社の男(第二章)、辛い恋愛の記憶を抱えた女性(第六、七、八章)、原稿を持ってきた女性(第一章)、数学に熱心な女性(第八章)、質問に来た三人の青年(第三四章)である。この他にも、直接の来客ではないが、書簡にて漢詩や俳句創作を求めてくる人々(第二二、二三章)についても語られている。

これらの他者との交流において、相手が約束を守らなかつた時や、後になって当初の約束以上の要求を出されたとき、あるいはこちらの都合を考えない人を相手にした時の不快感が伝えられる一方で、第六章と第七章での女性の悲痛な告白には「人間らしい好い心持」を感じ、古くからの友人Oの悪口にも気分を害することなく「透明な好い心持」になっている。「私」は他者の偽りや下心に対しては敏感に反応し、相手の好意やありのままの心に触れられたと感じた時に満足する潔癖な人物である。面会希望者には可能な限り会うようにし、その他の要望にもできる範囲で応えようとしている。それが見返りを求めるものではない「好意」であるというように、彼は他者に対して誠実であろうとしている。

第一二章では、富士登山の画をめぐる坂越の岩崎とのやり取りにおいて自らの過失に気付いた時に「恐縮し」て「丁寧な手紙を書いて、自分の怠慢を謝し」たことが語られ、続く第一三章では岩崎の執拗な句作の要求に不愉快を感じて「非紳士的な挨拶」までしてしまったが、年始に届いた普通の年賀状に「感心」して句を書き付けた短冊を送ったことを明かしている。このように、「私」は人間関係において潔癖と言えるほどに誠実であろうとしている。彼がそのようなようになってしまった理由は明らかではないが、第三一章と第三二章に語られている幼時の回想は特に重要である。

小学生であった頃に仲の良かった「喜いちちゃん」がある日、「私」に買い取るようにと友達から預った二冊の書籍を勧めてきた。「私」は値切ったうえでそれを買ったが、翌日になると「喜いちちゃん」が友達の父親に頼まれて本を取り戻しに来た。その時に自己の「不善の行為から起る不快」を感じ、「喜いちちゃん」に対しては「怒った」のだと分析している。それらは、内容も理解出来ない本を利益の為に値切つて手に入れたことに対する自己嫌悪と、自分のものではない本の値切りに独断で応じ、先方に言われるがままに取り戻しに来た「喜いちちゃん」の不誠実に対する反感であろう。結局、「私」は損得勘定で動いた自分の「狡猾」さをごまかすかのように本を「遣る」と言つて二五銭は受け取らなかつた。注意すべきは、「私のこの心理状態は、今の私が小供の時の自分を回顧して解剖するのだから、比較的明瞭に描き出されるやうなもの、其場合の私には殆ど解らなかつた」という点であり、当時の「私」は「苦い顔をしたといふ結果だけしか自覚し得なかつた」のである。過去においては認識されていなかった「不快」と「怒り」の感覚は、時間を隔てた現在においても苦い記憶として回想されるほどに強烈な印象を少年時代の彼に植え付けていた。当時すでに自他の不誠実を嫌っていた「私」は、そ

れよつて「不善の行為」や不誠実な行いを極度に嫌うようになり、人間関係上の潔癖を無自覚のまま強固に求めるようになったと考えられるのではないだろうか。

続く第三三章では、他者との関わりを避けられない現実生活において、疑いのない人間関係を築き得ない苦しみが吐露されている。疑いは自己の他者理解の能力と、他者の誠実との双方に向けられており、「もし世の中に全知全能の神があるならば、私は其神の前に跪びて、私に毫髪の疑を挟む余地もない程明らかな直覚を与へて、私を此苦悶から解脱せしめん事を祈る。でなければ、此不明な私の前に出て来る凡ての人を玲瓏透徹な正直ものに変化して、私と其人との魂がぴたりと合ふやうな幸福を授け給はん事を祈る」とまで書いている。しかし、「私」の苦悩は言うまでもなく彼が求める理想と現実との懸隔によるものであつて、「神」という言葉を持ち出さなくてはならない程に両者が隔たつていと認識していることが窺える。「不愉快に充ちた生」の根拠をここに求めることが出来るだろう。しかし、「不明な私」による「不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる」という実感は、決して人間関係に対する絶望を語つてゐるわけではない。

ここで見落としてならないのは、「私」が「喜いちちゃん」の回想を開始する直前の第三〇章で「継続中」について語つていたということである。彼はその中で「所詮我々は自分で夢の間に製造した爆裂弾を、思ひ／＼に抱きながら、一人残らず、死といふ遠い所へ、談笑しつゝ歩いて行くのではなからうか。唯どんなものを抱いてゐるのか、他も知らず自分も知らないの、仕合せなんだらう」と述べている。「不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる」という人間関係上の苦しみは、それに対する高い理想ゆえであり、彼は第三一章と第三二章の回想を通じて幼時から無自覚のうち作り上げてきたそれを「夢の間に製造した爆裂弾」として見

出したのである。第三章の語りは、第八章と同様に自己の中にある問題を認めて自らの限界を乗り越えようとする試みであったと言えるだろう。この点もまた未解決のまま語りは閉じられるが、しかし、第三章の語りを終えた「私」は、その後も「継続中」の他者の問題と向き合いながら、「何ういふ風に生きていくか」を問い続けることになるだろう。

第八章の執筆時点において「私」は「不愉快に充ちた人生」を過ごす中で「何時か一度到着しなければならぬ死といふ境地に就いて常に考へてゐる」といい、「死は生よりも尊とい」という言葉が「絶えず胸を往来」していた。彼がその人生を「不愉快」に感じていた大きな要因として他者の問題が挙げられる。人は社会から完全に孤立して生きることは出来ず、不可避である他者との関係性は常に「不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる」。そして、他者との関係に不満を抱くのは、彼が疑う余地のない程の「正直」さを相手の中に確かめる術を持たないからである。幼少時の「不快」と「怒」りの記憶にまで遡ることのできる人間関係上の拘りが彼を頑なにしていたと考えられる。「私」はほとんど外出もせずに書齋に一人で過ごし、時折来客がある程度であった。苦しい〈生〉の中で「死といふものを生よりは楽なものだとばかり信じ」るようになり、「死は生よりも尊とい」という他者とは共有し得ない死生観に自足していた。「私」は「小さな私と広い世の中とを隔離してゐる此硝子戸の中」で死生と「時」と他者の、それぞれの問題の複雑な絡み合いの中で鬱屈としていたのである。

書齋での停滞した日常からの脱却を求めて始められた『硝子戸の中』の語りの中で、「私」は〈生〉と〈死〉の間で迷う女性との出会いによって自己変革のきっかけを得ている。「死は生よりも尊とい」という自己の死生観からではなく「互いの根本義は如何に苦しくても如何に醜くても此生の上に置かれたものと解釈」し、「何ういふ風に生きていくか」とい

う観点から「凡てを癒す『時』の流れに従つて下れ」と助言した。第八章を語る時点においても「半信半疑」であったが、やがて「時」の力が〈生〉を改善し得ることを確かめる。そして、あらゆる問題に対する「継続中」の認識を得て〈生〉と〈死〉を連続した視点で捉えられるようになり、「不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる〈生〉」の苦しみの原因を自身の過去の中に見出したのである。このように、「私」は多様な語りの中に自らの問題点をさらけ出して自己変革を求め、その可能性を模索し続けたのである。

五、おわりに

まだ鶯が庭で時々鳴く。春風が折々思ひ出したやうに九花蘭の葉を揺かす。猫が何処かで痛く噛まれた米嚙を日に曝して、あたたかさうに眠つてゐる。先刻迄庭で護謨風船を揚げて騒いでゐた小供連は、みんな連れ立つて活動写真へ行つてしまつた。家も心もひとつりとしたうちに、私は硝子戸を開け放つて、静かな春の光のなかで、恍惚と此稿を書き終るのである。さうした後で、私は一寸腕を曲げて、此縁側に一眠り眠る積である。(三十九)

第一章では「硝子戸の中にはばかり坐つてゐた私」が、最終の第三章では「しばらく出た事のない裏庭」へ出ている。縁側に出て春の陽を受けながら、風に揺られる九花蘭の葉を眺め、鶯の声を聞く。「毎日硝子戸の中に坐つてゐた私は、まだ冬だ冬だと思つてゐるうちに、春は何時しか私の心を蕩揺し始めたのである」と述べているように、硝子戸の中で停滞していた自分自身の心が気付かぬ間に動き始めていたことを自覚する。春の暖かな日差しを受けながら「私」は現在の心境を書き綴つて

いる。

この随想作品の執筆について、「筆をとつて書かうとすれば、書く種は無尺蔵にあるやうな心持もするし、彼にしようか、是にしようかと迷ひ出すと、もう何を書いても詰らないのだといふ呑気な考も起つてきた」と語っている。書くことはいくらでもあるように思うが、書いてもつまらない気もするという。それは、彼がこれまでに書き続けてきたことによつて執筆開始時に抱いていた精神的な停滞感を解消する手がかりを得ていたからであろう。だからこそ「書く種は無尺蔵にあるやうな心持もする」と、依然として未解決の問題や語りの余地を残しながらも自身の心が「蕩揺し始めた」ことで『硝子戸の中』が閉じられたのである。それに加えて、「今度は今迄書いた事が全く無意味のやうに思はれ出した。何故あんなものを書いたのだらうといふ矛盾が私を嘲弄し始めた」が、「此嘲弄の上に乗つて上に乗つてふわ〜と高い瞑想の領分に上つて行くのが自分には大変な愉快になつた」という。「私」は一連の心的閉塞感の打開だけでなく、それまでの自己を相対化する視点を獲得しているのである。

また、「嘘を吐いて世間を欺く程の銜気がないにしても、もつと卑しい所、もつと悪い所、もつと面目を失するやうな自分の欠点を、つい発表しらずに仕舞つた」と振り返っている。それによつて「不快」を感じる人がいるかもしれないが、「私自身は今其不快の上に跨がつて、一般の人類をひろく見渡しながらかみ笑してゐ」て、「今迄自分詰らない事を書いた自分を、同じ眼で見渡しして、恰もそれが他人であつたかの感を抱きつ、矢張り微笑してゐる」のだという。そもそも「私」の執筆は多忙な読者の興を引くやうな「懺悔」ではなく、自己の停滞感の解消を大きな目的としていた。それが果たされたことに「微笑」し、「小さい私と広い世の中とを隔離してゐる」硝子戸を開け放つたのである。彼は消極的な

〈死〉への傾倒から脱して他者に満ちた「継続中」の〈生〉と向き合う姿勢とそのため視点を獲得したと言える。

一九一四（大正三）年末、「厭世観」に囚われて自らの〈死〉について考えていた漱石の気分は鬱屈としていた。年が明けてからも状況が変わることはなく、彼は「不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる〈生〉を厭い、自らに「半信半疑」しながら『硝子戸の中』を構想・起稿した。それら心的閉塞感は、これまでに見てきたやうな多様な語りの過程で次第に拭かれていったのである。

『硝子戸の中』の執筆終了後、漱石は小説『道草』¹⁸の執筆に取り掛かった。この作品はとりわけ自伝的要素が強く、自身の体験を素材としている。その冒頭に「彼の身体には新らしく後に見捨てた遠い国の臭がまだ附着してゐた。彼はそれを忌んだ。一日も早く其臭を振り落さなければならぬと思つた。さうして其臭のうちに潜んでゐる彼の誇りと満足には却つて気が付かなかつた」とあるように、主人公の健三は三人称の語り手によつて無意識に抱え込んでゐる問題を指摘されている。このやうな描写は作中に散見され、妻やかつての養父母、親類との関わりによつて苛立つ健三の内面が立体的に語り出されている。作品の自伝的側面に着目するならば、語り手による健三の批評は、漱石による自省であつたと捉える事が出来る。『硝子戸の中』で「所詮我々は自分で夢の間に製造した爆裂弾を、思ひ〜に抱きながら、一人残らず、死といふ遠い所へ、談笑し、歩いて行くのではなからうか」と語つたとき、漱石は自らの過去に現在の自己を苦しめる要因を見出す必要性を認めたのではないだろうか。『道草』において自らの経験を素材とし、その生い立ちや他者との関わりの中にそれらを見出そうとしたと言えるのである。そうした問題意識を生み出していったのが『硝子戸の中』の語りの中で展開された思考や見出された視点であることは言うまでもないだろう。

執筆中に何度も構想を変えながら柔軟に展開されたこの作品にはその時々、漱石の関心や思考が映されていると言え、幼少期から現在までを題材とした語りからは〈生〉と〈死〉、「時」、他者の主題が見いだされる。筆者が現在時点において抱えている問題とともに書き進められたこの随想は、単なる身边雑記ではなく閉塞した自己の内面の変革を求める場であった。その過程において得られたものが彼にとっては重要であり、次の創作に向かう動機たり得たのである。

註

- ① この時に第三章の末尾に新聞掲載後に寄せられた読者の反応に対する礼文が添えられた
- ② 江藤淳『夏目漱石』東京ライフ社、一九五六年一月。引用は『決定版 夏目漱石』（新潮社、一九七九年一月）の本文から行った。
- ③ 越智治雄「硝子戸の内外」『漱石私論』角川書店、一九七一年六月
- ④ 重松泰雄「薄ら寒さと春光と——『硝子戸の中』における〈過去〉——」『文学』一九八〇年夏号、一九八〇年一〇月
- ⑤ 柴市郎「『硝子戸の中』、その可能性」『漱石研究』第四号、一九九五年五月
- ⑥ 一九一五（大正四）年一月九日付の山本松之助宛書簡に「去冬、阪朝から新年に何かといふ注文があつたのを七草過迄延はして貰ふ事に相談が出来ました」とある。
- ⑦ 「木曜会の思ひ出」〔漱石全集月報〕第一三三号、岩波書店、一九二九年三月
- ⑧ 早坂禮吾「漱石研究の一資料——『硝子戸の中』の一女性」〔文学〕第一二卷第一〇号、一九四四年一〇月）に詳しい。
- ⑨ 佐藤真一。朝日新聞社編集局長。漱石の一九一三（大正三）年一〇月三十一日の日記によると、葬式は十一月一日であった。
- ⑩ 越智治雄「硝子戸の内外」『漱石私論』角川書店、一九七一年六月
- ⑪ 「断片六三A」、「断片六三B」〔漱石全集第二十卷〕岩波書店、一九九六

年七月）

- ⑫ 重松泰雄「薄ら寒さと春光と——『硝子戸の中』における〈過去〉——」〔文学〕一九八〇年夏号、一九八〇年一〇月
- ⑬ 漱石の日記（一九一〇（明治四三）年十一月五日）および「思ひ出す事など」（七の下）では「有る程の菊抛げ入れよ棺の中」。
- ⑭ 重松泰雄「薄ら寒さと春光と——『硝子戸の中』における〈過去〉——」〔前掲〕に詳しい。
- ⑮ 一九一四（大正三）年二月一五日付の畔柳芥舟宛書簡に「『硝子戸の中』を昨日切り上げた」とある。
- ⑯ 「断片六五」〔漱石全集第二十卷〕岩波書店、一九九六年七月）
- ⑰ 一九一三（大正二）年二月三〇日付岩崎太郎次宛書簡
- ⑱ 一九一五（大正四）年六月三日から九月一四日にかけて「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」の二紙上に掲載され、同年一〇月に岩波書店より単行本として刊行された。

付記

夏目漱石の著作物の引用はすべて『漱石全集』（岩波書店、一九九三年一月—二〇〇四年一〇月）に拠り、ルビは省略した。

（本学博士後期課程）